

クインシー（半促成・立体）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型												
主な作業	定植	交配		収穫								種播

技術体系

1 作型の特徴
他春作メロンに同

2 適応地域
平坦地域

3 栽培条件
他春作メロンに同

4 施設整備
他春作メロンに同

5 経営目標

(1) 収量	3.2 t / 10 a
(2) 投下労働時間	400時間 / 10 a
(3) 所得率	45%
(4) 経営規模	40 a

(家族労働力2人の場合)

栽培技術

1 品種と特性
葉の大きさは中くらいで、草勢が強い。つる割病（レース0と2）、うどんこ病に抵抗性があり雌花の着生は良く作りやすい。

2本仕立て1つる1果どりを励行する。早い作型

では、草勢コントロールのために大苗定植を行い、遅い作型では、十分な換気を行い草勢を締めて作る。

2 育苗

(1) 播種量 1300粒 (10 a)

(2) 苗立枯病予防

播種後は、苗立枯病予防をかねてオーソサイド水和剤80（800倍）をジョウロ又は噴霧機で全面散布する。

(3) 温度管理 (°C)

	床温		気温	
	昼温	夜温	昼温	夜温
播種～発芽	28~30	28~30	28~30	28~30
発芽～鉢上げ	23~25	20~23	25~28	15~18
鉢上げ～活着	25~28	25~26	27~28	20~23
育苗前半	25~26	20~22		
定植10日前	23~25	20~18	25~28	13~15
～定植	20	15	25	10

(4) 鉢上げ

子葉八分展開時に12cmポリポットに浅植えする。活着促進のために軽く株元に灌水するとともに床温を2～3℃上げる。

(5) 灌水

晴天日の午前中に行い、夕方には床土の表面が白く乾く程度の灌水量とする。特に、寒冷時の育苗で

あり冷水（上水道等）により根を痛めないようにする。

（6）鉢ずらし

葉と葉が重なるようになったら鉢ずらしを行い、太陽光線を十分に当て、軟弱徒長を防ぐ。

（7）馴化

定植10日前頃より定植後の活着を順調に行わせるために苗の馴化を行う。

（8）摘心

2本仕立ての場合、本葉4枚展開の頃、4枚残して親づるを摘心する。この時第1節目の側枝は除去しておく。

（9）育苗日数 40日

3 圃場準備

（1）耕起整地

圃場の土壤水分をみきわめながら、定植20日前までに終了する。

（2）定植準備

ビニル被覆、マルチ張り、中トンネル等の設置作業は定植20日以上（厳寒期定植の場合30日以上）前までに終了し、地温上昇を図る。（活着促進のため地表下10cmで地温18℃を確保）

4 定植

（1）定植

定植は、晴天日の午前中に行い、根鉢の8分めを目安に浅植する。定植時アブラムシ、スリップス防除を目的として登録のある粒剤を植え穴処理する。

（2）栽植方法

畝幅2 m, 条間80 cm（2条千鳥植え）

	単作	トマト後
つる間	45 cm (株間90 cm)	42 cm (株間84cm)
10 a 当たり	2,200 つる	2,380 つる

（3）温度管理

定植後は、活着促進のために日中33℃、夜間18℃（地温18℃）を確保する。

（4）灌水

活着するまでに1から2回株元に灌水し、活着後は株元を乾燥させ病害（つる枯病、立枯性疫病）の発生防止に努める。

5 整枝

（1）活着後、子づるが15～20cm程度のときに生育の揃ったものを2本残す。このとき、子葉と親づるの本葉2枚を摘除する。

（2）本葉7枚の頃に親づるの葉、小づるの下葉2枚、側枝、巻きひげ、雄花等全て除去し、生長点を揃えて誘引する。（つる先揃え＝交配を揃える）

（3）株元の病害

つる枯病等の発生を防止するために下葉を2回程度に分け4～5枚除去し通風を良くする。

（4）結果枝決定

12節以上を目標とし、同時交配できるような枝3本を残し（花の確認）、それ以外の側枝、雄花は除去する。

（5）摘心

摘心は必ずつるの節のところで行う。

子づる：交配2～3日前に、結果枝の上に葉を10枚残し摘心する。

結果枝：交配当日までに1～2葉残して摘心する。

（6）遊びづる

収穫期まで草勢を確保するために遊びづるを最低1本残す。

伸びが良い場合：生長点を一つ残すようにしながら摘心する。

伸びが悪い場合：液肥の灌注や葉面散布を行い草勢の維持を図る。

6 交配

（1）害虫防除

ミツバチ搬入1週間前（交配前10日頃）までに害虫防除を終える。

（2）ミツバチ搬入

交配3から4日前に搬入し、ハウス内環境に慣らしておく。

（3）交配日の記入

品質の揃ったメロンを収穫できるようにペイントや毛糸等で交配日を記入する。

(4) 花卉の除去

菌核病等を防除するために、交配後は花卉を除去する。

(5) 温度管理

開花期：朝方20℃に室温を上げ、一斉に開花させる。

着果後：最低夜温18℃を確保する。

7 摘果

果実が卵大の頃に、揃い、果形、花落ち等の良好な果実を1つる1果(2本仕立てで一株当たり2果)残す。

8 灌水

(1) 冷水の灌水は絶対に行わない。(定植、生育初期、果実肥大初期は特に注意)

(2) 結果枝を決める頃、結果枝の伸びが悪い場合にのみ軽く灌水する。結果枝の長さが2cm程度の頃、メロンの花(子房)が飛び出しているようであれば少量の灌水を行う。(交配期の結果枝の長さ2.5cm程度が目標)

(3) 果実がピンポン玉大になった頃、天候をみながら数回(少量)灌水を行い果実肥大を促進する。

9 硬化期の管理

(1) ネット発生前から発生色のかん水は控える(目安として交配後10~18日頃)。

(2) 硬化期には果実が鉛色になるようにする。ハウスは夕方から朝にかけて保温し、日中はよく換気する。低温、水分過多だと果皮が白色になりやすく、ヒルネットにつながる。

10 ネット発生期の管理

(1) 温度管理

日中30℃ 夜間18℃を目標に管理する。ネット発生初期に果実を指でたたいて、果実の硬化程度を確認する。カンカン(コンコン)と硬化音がする場合には、夕方早めにハウスを閉め保温に努める(ゆるみ促進)。

(2) 灌水

ネット発生中期以降は、朝方に数回灌水を行い、果実肥大を促進しネット発現を促す。

(3) 換気

日中は十分換気し、葉先が垂れないように注意する。

11 仕上げ期の管理

(1) 温度管理

日中27~28℃ 夜間16℃で管理する。(夜間最低気温が16℃を超えるような時は夜間も解放する。)

(2) ネット発現終期頃より果実の軟化程度を確認し、仕上げの管理に入る。果実は硬い場合には、夕方ハウスを早く閉め保温に努め、軟化させてから仕上げに入る。

(3) 仕上げ期は、日中充分換気しハウス内の温度、湿度を下げる。特に遅い作型では、高温で糖度が乗らず過熟になり易いため注意する。

(4) 土壌水分は徐々に下げていくが、萎れるような極端な水切りは行わない。

12 収穫

県の出荷基準に基づき、糖度を確認し収穫する。